

自序

「肋骨骨折」を表題に著した超音波検査の書物はいまだお目にかかったことがない。筆者が肋骨骨折を疑う超音波画像に遭遇したのが20数年前のことである。痛みのある部位にリニア探触子で「チョイアテ」したところ、肋骨に段差がみられ、近隣肋骨とは明らかに違いがみられ骨折を知るきっかけとなった。当時、骨の検査は超音波になじまないことは検査をする者の常識であった。この事実を検証したく、ニワトリの骨を用い実験したところ骨折部分が段差として描出され確信を得た。それ以来、胸痛のある被験者には機会あるごとに「チョイアテ」の意義を実感している。一方、日常診療における肋骨骨折の標準的診断法は胸部X線写真によるものである。しかし、籠状を成す胸郭内には肺や心臓などの臓器が存在し、その外側を成す肋骨走行の複雑さはX線撮影の体位・撮影条件の設定に苦慮することが多く、これら複雑要因が絡むX線写真の読影には困難を齎すことは必至である。この事実を知りたく肋骨骨折における胸部X線写真と超音波像の描出能を検討した結果、X線写真で骨折転位が認められたものは半数程度であり、超音波検査が優れていることがわかった。この実情を多くの先生に知ってもらいたいとの思いから『知っておきたい 肋骨骨折エコー』を上梓するきっかけになった。

本書は肋骨の解剖にはじまり、肋骨の走査と正常エコー像、骨折類似像、肋骨骨折におけるチェックポイント、症例提示の構成としてある。加えて胸部損傷や腹部損傷において、迅速簡易超音波検査FASTの依頼に基づく胸腔や腹腔などのエコー検査にも対応できるようこの項をもうけた。この他、腹部エコー検査の過程で横隔膜や胸膜に接しecho free spaceや胸腔内腫瘍の存在に気付くことがあり、これら症例についても若干の頁を割いた。なお、胸腔内疾患の症例では拙著『体表エコーの実践』（1993年、医療科学社刊）より引用したものが含まれていることをお断りしておく。

本書の上梓に際し、当院（浜松南病院）梅原慶太 整形外科部長には肋骨骨折に関する臨床や胸部X線写真と超音波像における描出能の比較・検討などで多くの時間を割いてくださいました。花井洋行 消化器病・IBDセンター長、渡邊文利院長はじめ診療部・技術部の先生には日頃から何かと深いご理解と心強い後押しをしてくださいました。また、静岡県藤枝市立総合病院 副院長 救急診療部長 関谷洋先生、統括診療部長 丸山保彦先生には本書へのご理解とご教示を賜ることができました。各先生に心から厚くお礼申し上げます。

末筆になりましたが今もって超音波検査と深い関わりを持つことができますことは偏に日本超音波医学会重鎮 竹原靖明先生のお蔭であり、この度は推薦のこぼを賜り正に画竜点睛できたものと深く感謝申し上げます。

本書が肋骨骨折においても超音波検査の有用性が発揮できる検査であることを知っていただくきっかけになれば大変嬉しく思います。

2015（平成27）年 新春
杉山 高